

## まえがき

### (一)

北陸の富山には、古い伝統をもちながら、今日も活発な全国行商を続ける特殊な産業がある。富山売薬業である。江戸中期に形成され、行商人は幕末に約四五〇〇〇人、明治期七〇〇〇〇人、大正、昭和初期には一万人に達した。そして現在も六〇〇〇〇人がこの産業に従事している。

彼らは富山の町を中心としながらも、その周辺の富山平野の町々や農村地帯に広く分布してきた。戦後はこの周辺地帯に比較的多く分散化する傾向にある。現在は富山平野から全国に毎年行商する従来からの形態に対し、旅先に定住し、旅先の居住地においてやはり行商をする新しい傾向もあらわれてきている。このために現在の富山からの行商人の数が減少して六〇〇〇〇人となっている。

本書は、幕末から明治、大正、昭和そして最近にいたるまでの大きな時代の変化の中を生きてきた富山売薬業について、その史料を収集したものである。

### (二)

ここで、富山売薬業について、簡単にその形成要因を考えてみよう。

まず、この成立については、伝説として、富山二代藩主前田正甫公の江戸城における他藩主の救急処置に役

立った反魂丹があげられる。これは富山売薬の基本になったとされる。

第二には、富山地方の名山として信仰された立山信仰からの派生をあげることができる。中世の山岳信仰として広く全国の多くの地方から夏季に立山に登拝にきた。他の季節にふもとの芦峯寺では立山のお札と薬をもつてこれらの諸地方を回った慣習が、富山売薬行商の形成に影響したとみるのである。

さらに第三の形成要因として、社会経済的背景がある。成立期は元禄頃でわが国の交通が整備され、所謂全国経済が成立した。(1)北陸道により近畿と北陸・東北が結ばれ、また関東にも通ずる。(2)飛騨街道により東海に結ばれた。さらに(3)西回り海運、北前船により大坂と北陸、東北が結ばれた。なおこの大坂経済圏との関係が重要であった。大坂との物資の交流が活発になって、大坂から漢方薬が得られた。牛黄、ジャ香等中国からの高貴薬が入り、これを原料として良質で効力のある富山売薬が成立した。これによって「地方的」な薬から「全国的」な薬として存する価値をもつことになった。なお富山には、重要な原料薬は存在しなかった。それにも拘らずこの産業が形成されたのは風土の作用を無視できない。即ち第四に、売薬形成の経営環境 business climate として風土があげられる。中でも北アルプスからの急流の七大河川が富山平野に密集していて起こる洪水が重要である。多くの急流が並んで流れ下る地形は世界にもめずらしい。しかも洪水の頻度が極めて高く、神通川については明治年間三十三回、大正年間十一回で、三年に二回の割である。それは六、七、八の三カ月に集中する。次は火災が多いこと。春先のフェーン現象は大火災になり易い。明治十八年富山市では五九二五戸、明治二十年七〇〇戸が焼失した。四月に最も多い。とくに北陸は積雪地帯として著名であり、最も季節的である。以上の現象は厳しいと共に極めて季節的リズムをもつことに特徴がある。

このような風土に育てられる人間の生き方は、季節的リズムに対応して生命を保育する仕組みをもつことで

あり、積極的合理主義、実利的努力主義が派生する。なお富山では寺子屋が発達していたが、それは読みかき、そろばんが主として教えられ、実用的で商業実践の基礎づくりのものであった。これらの要因が集積して形成されたと考えられる。

こうして成立した売薬業について、その行商人の分布をみると、県内では洪水地域と一致し、とくに交通路に沿うて集積する。旅先では関東、関西、濃尾の方面が多い。しかし既成の都市ではなく、綿や織物、たばこ、なたね、酒造等の新興の農民的商品生産地帯が主として好んで選ばれた。「反対に城下町や商業都市は敬遠された。

さらに旅先藩との交渉をみると、貿易まさつの回避を巧みに進めた。当時は各藩は独立の経済を営み、保護貿易主義、国産奨励の時代であり、旅先藩からの行商営業の指留をしばしば受けた。旅先藩の利益を考慮し貿易の均衡に努めると共に、旅先藩に名誉領事を置いて巧みな交渉をはかった。こうして彼らは旅先藩に入る全行商を果たしたのである。(拙著「行商圈と領域経済—富山売薬業史の研究」および「富山の商業」参照)

最後に経営管理をみると、その巧みさが把握できる。彼らが全国市場を確保し続けてきたのは「完全な商人」ともいえる経営の完璧さであった。それは(1)信用、信頼を旨とし、おみやげ(藩には羽二重、得意先には紙風船、版画)を忘れない。(2)よい商品(漢方薬を主な原料)、(3)市場調査、(4)記帳(懸場帳)の四項目に徹した。これはあたかもフランス十七世紀のジャック・サバリーの「完全な商人」における商業経営の理念と一致する。商業の原点を示す経営であったといえる。

(三)

次に幕末以後における富山売薬業の推移を略説しよう。明治期に入ると西洋文明の伝来によって、従来の和漢薬を中心にした売薬については、福沢諭吉のように無効無害とする考えも根強くあらわれた。富山売薬商人はこの時代的風潮に対決すると共に新たに洋薬の採用に踏みきった。また経営面においても近代化をはかり、堂号組織の協同結社を設立した。売薬行商人たちは集まって資金をだしあって、廣貫堂や師天堂などを次々に設立し、仕事場として新しい製薬の作業場を建設した。

こうして藩政時代には、行商人は旅先から帰国すると、自家の一部で原料薬を薬種屋から仕入れて製薬し、製品化してそれを次の行商に運んでいた仕組は、大きく変動し、流通過程と製造過程は分離する建て前になった。

しかし、西南の役以後は売薬業は重大な試練にたたされた。財政難から売薬印紙税が課せられた。売薬について定価の一〇%の印紙を各薬品に貼布することとされたのである。明治新政府の財政収入は地租を中心としながら、このほか酒税、煙草税であったが、明治十五年に売薬が課税の対象となった。過大な重税とされたのは税率そのものも高いものであったが、もっと重大なのは、旅先に配置して次の行商の際に使用分についてのみ資金が回収されるこの配置薬制度のシステムにおいて、未使用分の薬について課税されることであった。明治十五年九〇〇〇人の行商人が十七年には五〇〇〇人になり、生産額六七二万円が六五万円に激減したといわれる。政府に対して、業界は一丸となって、持続的に激しく撤廃の陳情運動を続けた。これと共にまた一方では、積極的に時代の大勢に対応するように、業界内において、売薬の振興策を樹立した。教育機関を新設して、

製薬の近代化と行商人の知識の向上を計った。こうして薬学校や官立富山薬学専門学校が設立された。

この課税問題は明治十九年に至って「売薬印紙交換規則」が公布され、未使用の売薬の印紙は交換されることになり、一応の落ち着きを取り戻した。明治末の売薬印紙税貼用高は、富山が四十三万五九七九円、大阪四十三万五五七六円、東京三十三万四五一二円、奈良十二万一九二九円であって、富山は全国の第一位であった。

明治期の薬事行政は、初めは大学東校で行われ、それが文部省、内務省に移った。売薬業者たちは藩政時代には仲間組を組織していたが、その解放後は新たな業者の組織化が必要であった。元来、富山平野は富山の町を中心とする富山領とその東と西は加賀領から成りたっていた。平野の売薬業者はこの二つの領域に分布して、その中でも富山の町の業者は強固な仲間組を組織していた。加賀領の業者も別の組を作っていた。明治になり、この領域の問題はなくなったが、新たな禄を失った武士の新規業者も加わった。こうして業界として一体化が必要であった。とくに製剤の改良、需要者の信用確保をはかり、業界の隆盛をはかるため、ことに売薬印紙税の厳しい税対策の面からも組織化が要請せられた。明治二十年に、富山県下薬業組合の結成が計られ、実際は三十五年富山市の同業組合ができ、四十一年県下全体の富山県売薬同業組合が結成された。

近代社会では、医薬品の製造には、各種の規制が必要とされたが、売薬の調剤は薬剤師によるべきものときれた。医療の補助機関として品質の向上が計られ、大正三年売薬法が公布された。売薬の改良、製剤の規制、資格の制限、広告制限等が規定された。多くは会社組織において、薬剤師によって製薬されることになった。

なお四十年間にわたって反対陳情が続けられた売薬印紙税は、大正十五年に廃止となった。富山売薬業はここで再び活発化することになった。売薬印紙税の廃止により、経費負担が、軽減となり、その印紙分の払戻金が回収されて、拡張資金に向けられ、行商人数も増加した。

しかしまもなく昭和初期には、金融恐慌を迎え、売薬業もその影響が甚大であった。とくに薬の使用分の支払いが減退した。また行商人の数が増加して過当競争となり、売薬の価格も値引きが拡がった。さらに全購連やその他の団体が売薬業を営みはじめ、これらとの競争もおこり、経営も困難となった。こうして不況対策として業者間の連帯性が必要となり、行先毎の行商人の団体として最寄会もよりが成立した。昭和七年には富山県売薬行商最寄会連合会が組織された。そして、製薬業者を含めた売薬業界全体の団体である富山県売薬同業組合として一体となった。さらに昭和十三年から国民健康保険制度が実施され、その影響もあり、業界として、これに対処することも次第に重大な課題となってきた。

昭和恐慌は、とくに農村不況として、売薬業界も苦しむことになったが、都市部に新たに市場を開拓すると共に、また行商地域を一層拡張し、北は樺太から南は台湾までの諸地域に拡大した。また海外売薬として、朝鮮や中国や南方に販路を拡めた。昭和初期には遠く、メキシコに輸出したがまた満州や中国、タイ、ビルマ、マレー、フィリピンに進出した。なお既に台湾が日露戦争の結果、わが国に領有された後は、台湾にまで行商していた。

満州や中国、南方への進出は、日本の海外進出という時代的背景によったが、戦局の進むにつれて、原料薬の不足対策や配給確保に努めなければならなくなった。さらに経済統制が強化されて、製薬会社の一県一社制の原則が打ち立てられ、このために、企業合同が行われた。国家総動員法に基づいて、日本売薬統制会社の改組により、「日本家庭薬統制会社」となり、「売薬」は、以後は「家庭薬」の新しい名称で呼ばれることになった。また行商面の統制としては、戦時動員によるこの業界の人手不足から行商不能の事態もおこり、一戸一袋制がとられた。行商する家に対して、富山のみでなく、奈良、滋賀、佐賀などの売薬行商人の得意先も合わせ

て、地域別に割り当てられることになった。事実上は、行商の継続は困難な事態になった。

終戦後は経済の荒廃、混乱、そしてインフレの急進となったが、また戦時中の売薬の統制が解除になった。けれども、本来的な配置制は混乱した。原料薬の入手難は続き、行商面では、乱売や現金売りが現われた。この新時代に対処するため昭和二十二年富山薬業会が設立された。そして戦後社会の落ち着きと共に売薬業も正常化へと復帰した。ただ戦後は復員や引揚者には行商配置を希望する者も出てきたり、また農村では兼業として農閑期に売薬行商を営む者が増加した。こうして戦後は農村部に行商人が多く分布するようになった。また製薬の近代設備が要請され、その後GMPが施行せられて、品質管理が前進した。

#### (四)

その薬の行商販売する範囲は、全国の各地にわたっているもので、その全国市場関係や各地における足跡を調べることに、そしてそこにおける経営の実態を明らかにすること自体も、興味ある問題である。

その例は、北海道の市町村史に数多くみることができる。とくに北海道の開拓が進んだ明治期には、富山の売薬は、これらの開拓地で歓迎された。そして開拓地に売薬の商人たちは、数多く進出していった。医療施設のない開墾地では、病気が何よりも恐れられたのであり、家族の生命や病気を守る貴重な役割を果たした。原野や原始林の間を通り、また熊の出る開墾地をもとめせずに行商し、開拓の数年後には、もう売薬商人たちは進入していた。

北海道には農業移民のほか、漁業や商業の開拓に富山県から多く移住していき、明治末期には全国各府県からの移住者数の中で、長い間第一位の多数をしめていた。売薬商人たちは、いたるところの開拓前線を充実し

ていく役目を果たした。そしてまたこの背後から銀行の支店が富山県から広く進出していった。現在も富山県に本店のある北陸銀行は、北海道内に広く支店網を形成している。

北海道の市町村史では、開拓期の富山売薬商人に触れるものが少なくない。「津別町史」（昭和二十九年）には、僻地の故にあたら一命を失った者は少なしとしない。医療は受けられず売薬によらねばならなかったと言い、また「弟子屈町史」（昭和二十四年）や「訓子府町史」（昭和四十二年）には、鮮やかな描写をもって述べる。即ち開拓初期から農家のほとんどのに配付したこと、屯田兵村のあるところは必ず配置員がまわったこと、病気になると唯一のたよりは富山の売薬だったことを述べる。そして腹痛には赤玉、風邪には振り出し、気付けにはピルス、宝丹だの、延齡丹だのというのがあった。一年に一度しか入れ替えに来ないので、途中で品切れになると、矢張りそこらの草の根を探して薬にしたと切実に実情を記述している。売薬商人たちは、売薬荷物を背負い、散在する得意先を丹念に歩き回り、毎年一回薬包を入替えにくる。子供たちは紙風船や食中毒の注意書きの絵の説明図をくれるので、どの人からも心待ちにされていたと述べられている。

また「洞爺村史」（昭和五十一年）にいたっては、開拓地の隅々まで足を運び、中心地の倶知安には、明治二十五年に七人の売薬人が入り、開拓地には影のように寄り添って唯一の健康の担い手であったとその役割を評価し、そして今まで北海道の歴史、また各市町村史誌の中で、彼らの果たした役割に全く触れようとしないうのは、片手落ちも甚だしいといわねばならないと強い表現をもって述べている。当時は、売薬荷物は富山から船便で岩内に陸上げされ、そして山を越えて倶知安に運ばれた。函館本線が走るようになるまでは、虻田郡一帯は岩内からこうして各地に配達された。洞爺村の最初は、岩倉日誌によれば、明治二十六年の十月に薬の入れ替えにきたとあることを記述している。その後は引き続いて行商にきていたが、昭和十七年には、戦時の統制



経済によって、菓の配置区域が規制されることになり、一社一区域となった。そして富山売菓商人は洞爺村、倶知安町、京極町の区域に限定をうけることになったとする。

また彼らは、便利で有用な社会的機能を果たしていたとして、「上砂川市井史」（昭和三十二年）には、いかなる山間渓谷でも、開墾者の入植している所は、必ず勇敢に入ってきた。地味な着物をきて、大きな菓の荷を背負っていた。一年に一回しか来ないのに、子供らのことなどもよく覚えていて「坊やは丈夫か」などと、門口から声をかけながら家に入ってきて、すぐ紙風船などを出して与えるなど、誠に如才がなかった。彼らはあちこち回るので、農衣や小道具の注文を依頼されたり、知人への伝言を引き受けたりして、重宝がられた。

以上のように、富山売菓商人の行商が、開拓期の北海道において極めて重要であった。

このほかにも、よく取りあげているのは、南の鹿児島県内の市町村史誌類である。

鹿児島県に富山の菓売りが入っていたことは、「日本の民俗」四十六の「鹿児島」（昭和五十年）にあり、この書物では、「反物や雑貨の行商人が来たこと」、「明治のころから富山の菓売り、紀州の梔売りなども来た」とある。

「永平川流域山麓地帯の民俗」（昭和五十一年）には、この地方に「訪れる人は越中の菓売」その他の日用品売共があり、日吉町扇尾の項では「菓売りは時を定めてまわって来た」（同書）とある。また、薩摩郡の「入来町誌」下巻（昭和五十三年）にも、「越中富山の入れつけ菓商」などの行商人が来たことを述べる。また「大口市郷土誌」上巻（昭和五十六年）には、「行商は今でも見られるが、明治、大正、昭和にかけては、各種の行商人が大口の農村を訪れた」と記述し、なかでも塩を運んでくる例として明治頃まではシオ親といって親類づき合いしていることなどを述べる。「このほか、豊後の反物売り、越中どん、オイチニといって手風琴をひい

て、菓を売り、風船をくれるイチヤツカンなどいろんな物売りがやってきた」とする。また「き 耶答院 蘭 幸田 郷 土誌」（昭和四十八年）にも、人口が少なく交通不便で商売は振るわないこの地方では「くすりは全戸、越中 富山の入付け菓を使用していた」と、その普及ぶりを記述している。

富山の菓売りは一般的には、行商が終われば、富山に帰国するのであるが、例外的には帰国しないで旅先に 定住した例もあった。「日本の民俗」四十六の「鹿児島」には、この実例として「熊毛郡上屋久町永田では、 西南の役どころ、越中の菓売りが来たが、その人はその後、永田に住みつき、越中から袋と原料を持って来て 永田で菓をつくり、屋久島中を売り歩いたという。」特殊な例をあげる。明治頃は、旅先地に定住するというこ とは全くあり得ないことであった。尤も現在ではこの旅先地居住という例は次第に多くなってきた。

また「大崎町史」（昭和五十一年）には、明治頃の町の状況を述べて、旅人宿が三軒あり、ここに「旅芸人や 富山の置き菓売り（越中どん）は自炊をしながら宿泊していた。越中どんは竹箆に補充の菓を入れた黒の大風 呂敷を背負って、置き菓の計算をし、補充の菓を置いて家々をまわっていた。子供には紙風船（カゼブクロ）、 風車（カゼグルマ）、婦人には針を土産に置いたものである」とその行動の実態を述べている。

「国分郷土誌」（昭和四十八年）には、その歴史的由来にふれて、「薩藩が徹底した鎖国主義をとっていたこ とは有名で、行商にも種々な制限が加えられていたが、富山の売菓商人だけは特別扱いがなされ、元明（マト）以前に 藩の行商の許可を受け、薩摩組という組織までできていた。明治の中頃から大正時代にかけては、行商人が庶 民の需要を充たしてくれた。」とあり、同じく明治頃には、この地方では、「商業としては村間に二、三の雑貨 店のあるのみならず、日々行商人の通うありて不便を感ずることなし」とあって、日用品の行商人の活動が 盛んであったようである。たゞこの栽培地として有名なこの地方は、幕末には、この農民的商品生産による豊

かな土地柄であり、富山売薬商人の活躍した土地であった。

「東郷町」(昭和四十四年)にも、行商人が多く地方に入り込んで商いをしてきた例をあげて、中でも、「越中富山の『いれつけ』(売薬商)は有名である。富山から派遣された行商人は、特定の御得意様の宅を宿として、ここを根城に各家庭を訪問し、いろいろの薬を箱に詰め合わせて配置していた。そして年二回(年一回の行商人もあった)。定期的に來訪して、配備数と現在数を当たって、不足数だけの代金を請求受領し、再び新しい薬を必要量だけ配備していくのである。現在では医者や薬剤師に薬を調査してもらったり、薬店で手軽に購入できるようになり、富山薬の必要性も薄れて来たので、売薬商人の数も少なくなってはきたが、なお根強い親しみが保たれている」とある。この「東郷町」の場合のように、特定の得意先の宅を宿とし、ここを根城にしてその周辺を行商したことが記されているが、このような例は他にも多くみられた。規定の宿泊料金を請求され、ないしは支払うものではなかったが、それだけ信頼され、信用されていた。そして現在、即ち昭和四十四年でも「親しみが保たれている」ことが明確に述べられている。「東郷町」と同じ経営についての記述は、「長島町郷土史」(昭和四十九年)の中にも見出される。「川辺町」(昭和五十一年)には、販売形態の特殊性と共に、薩摩領内の行商の由来をも説き、また富山以外の奈良県や熊本県からの薬売り人も同じく「越中どん」と呼んでいた慣習を次のように述べる。

「越中どん」も特異な行商の一つである。越中どんの配置売薬という特有の販売法は、天明以前に起源を待つといわれる。各戸に袋に入れた薬を置き、一定期間たってから使っただけの代金を受取り、また薬を入れ付けてゆくという方式で、全国をまたにかけて回っていた。越中富山の反魂丹という薬の名は誰知らぬ者もないほどであった。

薩藩領内で越中どんが行商を始めたのは、参勤交替の途次、薩摩の殿様が急にぐあいが悪くなり、苦しんでいる所に都合よく越中どんが通りかかり、差上げた薬で問もなく良くなったので、他領商人の外城入り込みの禁をゆるめて免許状を与え、薩摩に入れ付けを始めた時からだといわれている。後には特別に冥加金を納めて引き続き行商が許され、いちばん盛んな時は二十六脚まで許された。一脚というのは行商人一人が定期的に回り得る懸場かけばのことである。越中どんたちは薩摩組という組織をつくって団結して自分の利益を守った。その後、大和（奈良県）や肥後の高瀬の赤玉の配置元薬なども入り込んできたが、これらの行商人までひっくり返るめて越中どんと呼んだ。

さらに一層詳細に富山売薬商人の配置した「家庭常備薬」の由来やその普及、また服装、経営管理や経管理念等について述べるのは薩摩郡の「薩摩町郷土誌」（昭和四十三年）である。家庭常備薬の項において、その代表的なくすりの「越中富山の反魂丹」として取りあげている。

越中富山の反魂丹 農村の医療に大きな役割を果たし、また果たしつつあるものに越中富山の配置薬がある。これら富山の売薬商人は全国的に行商に従ったが、享保（一七一六）の頃から既に薩摩藩領内の行商を許され、薩摩組の組織があったという。藩政時代はたびたび藩内の行商を禁ぜられたこともあったが、その都度多額の運動費を納めたり、また毎年多くの冥加金を納める条件で、薩摩藩内の行商を維持して来た。

股引、半纏姿で紺の大風呂敷に大小、数段重ねの柳行李に各種の薬を入れて背負い、徒歩で各戸を廻って備え付けの薬箱の中を調べ、一年間の使用量を種類別に調べてまた薬を補給してゆく。越中の薬屋は毎年大概十一月頃に姿を見せる。腰に差した矢立（墨と筆が入れている）を取り出して計算書を作ると共に、

四角な紙風船を子供に呉れる。飲むまいと思っても風邪や腹痛には手軽なこの薬について手を出し、一年間には薬代も相当な額に上る。富山の薬屋は無理に薬代の請求もしない代りに、この薬箱を絶対に引き取ってくれない。いつかは飲んで貰えるのだ、という越中富山の薬屋の根気強さには驚嘆する。俗に、「ピラミン」とか「御本山どん」とか呼ばれる各種の薬屋がそれぞれに入れつけてあり、また最近では肥前鹿島の「森田」や肥後の「赤玉」とか、会社名や代表的薬名で呼ばれる富山以外の薬も常置してあり、一戸に普通四個乃至五個の薬箱が常備されている。

この売薬だけに頼っていて発病初期の大事な治療を間違え重症になってから医師が来るので、早期診断・早期治療の保健の趣旨からは、よくないとは言われながらも軽度の病気は治るので、案外に農家では評判がよい。

この富山の薬屋も徒歩が自転車に代り、昭和三十七年頃からはオートバイに変ったが、そのたくましい商魂と越中富山の反魂丹の信用と商法だけは今日までも引継がれている。これが富山の売薬商人の根性というものである。この根性があったから享保の昔から二五〇年の今日まで連綿として続いている。

このように、北は北海道において、南は鹿児島において、その市町村史誌の中に、富山売薬商人の経営について記述していることは注目に値する。それはまた、それぞれの地域において、重要な役割を果たしているのであって、共に特筆されるべき事柄である。

以上のような記述は、富山県内の市町村史誌にも当然に見られる。「中田町誌」(昭和四十三年)には、「くすりの町・中田」の項において、一〇〇頁余りにわたって詳細に述べる。同じように、滑川、四方、上市など

の市町誌にも取り扱われている。これらを体系的、組織的に総括して理解することも意味深いことである。本書編さんの目的でもある。

昭和五十七年十月一日

編集責任者

植村元覚